

1 田植え

トビイロウンカの被害や登熟期間の高温遭遇による品質低下を防ぐため、早植えは行わず、6月20日以降に適期植えを行います。また、極端な疎植は、紋枯病のリスクが高くなり、充実不足により、収量・品質が低下しやすくなるため、避けます。

<栽植目安>

坪当たり50~60株、1株当たり3~4本

2 病害虫防除

・「元気つくし」はいもち病耐性が「弱」のため、アンコール箱粒剤を使用します。

品種	箱粒剤	対象病害虫
「元気つくし」	アンコール箱粒剤	いもち病・ウンカ類・コブノメガ
「ヒノヒカリ」 「ツクシホマレ」	フェルテラゼクサロン箱粒剤	ウンカ類・コブノメガ

<留意点>

- ・効果の安定のため田植え前日までに散布します。
- ・確実に50g/箱を施用します（薬量が少ないと効果が不十分）。
- ・散布後は薬剤定着のため軽くジョロでかん水します。

3 雑草防除（初中期一発除草剤）

こよみの<初期（初中期一発）除草剤>を参考に、農薬の使用基準に従い使用期間内に除草剤を使用します。田植えから除草剤の散布まで日があくと雑草の生育も進むため、使用時期が遅れないよう注意します。

<水管理>

- ・除草効果の安定のため、田面を均平にし、散布後7日間は湛水します。
- ・除草剤成分の河川への流亡を防ぐため、散布後7日間は落水できません。
(漏水に注意)
- ・田植え同時処理を行う場合は、移植後速やかに入水します。
(土の戻りが悪いところでは使用を避けます)

4 麦わらすき込み田の管理のポイント

● 深めに耕起する

- ・ 麦わらが短いと浮き上がりやすいため、やや長め（20cm程度）に切断します。
- ・ やや深めに耕して麦わらを土中へ埋没させます。

● 代かきの水は最小限度で（漉かき）

- ・ 尾輪の跡に水がたまる程度のごく浅水で、荒代かきを行います。
- ・ 麦わらの浮き上がり防止のため、代かきのときはロータリの回転は遅くします。



やや長め（20cm程度）に切断



尾輪の跡に水がたまる程度

● 基肥を増肥

（10aあたり窒素成分で2kg）

- ・ 麦わらの分解の際に微生物が土壌中の窒素を使用するため、麦わらすき込み開始から3年間は窒素成分2kg（硫安の場合は10kg）/10aを増肥します。

（なおブロックローションでの大豆作の年も3年間に含めます）

- ・ 窒素を増肥することで、麦わらの分解を促進することができます。

※ヒノヒカリより収穫が遅い品種は、生育期間が長く、十分な生育量を確保できるため、増肥の必要はありません。

● 水管理でガス害を予防

- ・ 分解中に発生するガスにより稲の活着が悪くなることがあるため、水管理を徹底します。
- ・ 田植え後、除草剤散布までの間は浅水とします。
- ・ 除草剤散布後1週間は湛水し、7日以上経過してから強制落水し、ガス抜きします。落水後もガスが発生する場合は、間断かん水を行います。（3～4日おきに湛水と落水を繰り返す）